まなびと+ Plus vol.10

対談『13歳からのアート思考』

奥村高明×末永幸歩

はじめに（奥村高明）

アートと美術について近年、教養やデザイン思考などビジネスの側面からとらえられることが増え、様々な本が出版されました。中でも『「自分だけの答え」が見つかる 13歳からのアート思考 』という本は、18万部のベストセラーとなっています。

本書がこれまでと大きく異なっているのは、現役の美術教師が美術の授業をもとに組み立てた美術教育の本だということ。読み進めていくと、まるで実際に授業を受けているかのような感覚に陥ります。

今回、その著者である末永幸歩先生をお招きする機会を得ました。美術の授業が本にまとまっていった経緯や、ピカソの「子供はみんなアーティストだ」という言葉が執筆の背景にあることなどを伺いながら、「アートは私たちにとって、大切な世界の見方であること」「私たちが生きていく上で重要な基盤になっていること」について対話を進めます。

美術の授業から生まれた本

奥村：まず『13歳からのアート思考』を出したきっかけをお聞かせください。

末永：学校で美術の授業をしていて、生徒たちの反応を見ていると「実はすごく面白いことしているんじゃないか」と感じることが多かったんですね。それで、授業の様子を書いた資料を配布するなど、他の先生にも何とか伝えようとしてみたんですけど、なかなかうまくいかなかったんです。でも夫に授業の話をすると……夫は普通のビジネスパーソンで、美術に興味のない人なんですが、それでも「面白いね」と言ってくれて。そこで自家製本というか、書いたものを冊子のような形にして、簡単な表紙も付

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報 詳しくはWebへ! 日文 検索

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

未来をになう子どもたちへ 日本文教出版

末永幸歩・著『「自分だけの答え」が見つかる 13歳からのアート思考』（ダイヤモンド社）2020年発行。〈「すばらしい作品」ってどんなもの？〉〈「リアルさ」ってなんだ？〉〈私たちの目には「なに」が見えている？〉など、興味引かれるコンテンツが並ぶ本書は、美術教育に留まらない「ものの見方」を教えてくれます。

けてみたんです。

動画やWebという方法を選ばなかったのは、本は読者のペースで考えながら読むことができますし、一連のまとまりをもったものからです。授業って、一方向的に視聴させたり、一部分だけ切り取ったりしても伝わらないですよね。読者が主体になって考えたり、前後の流れが全部あってこその授業と思ったので、まとまった授業の内容を伝えるには本が一番いいんじゃないかと。そうしてまとめた本を、たまたま夫が仕事でつながりのあった方に渡して、そこからどんどん縁がつながり、出版することになりました。

奥村：美術の授業実践から始まって、生徒、家族、仕事先と、縁が転んでいったんですね。「世界は因果だけでつくられているわけではなくて、縁起で成り立っている」というのはお釈迦様がおっしゃったことらしいですが*[1]、名画についても「名画は描かれたとたんに名画になるわけじゃなくて、いろんな縁や動きで名画になっていく」ことを、多くの人々が指摘しています。

ちょっとWebを引けば分かりますが、19世紀まではダ・ヴィンチよりもラファエロの方が評価は高かったそうです。しかし1911年、『モナ・リザ』がルーブルから盗まれてしまいます。盗難後、『モナ・リザ』のあった場所だけぽつんと空いている写真を見ると、『モナ・リザ』はあくまでも多くの絵の一枚に過ぎなかったことが分かります*[2]。ですが『モナ・リザ』は盗難にも遭いましたし、アメリカに持って行ったときに700億円ぐらいの保険がかけられるなど、その後も様々な縁があって最高の名画になっていきます。

美術そのものが縁起、そして美術の授業も縁起、そこからの出版も縁起ってなかなか素敵な話ですね。その後もいろいろな縁が広がったのではないですか？

末永：はい。この本を出してから、すごくたくさんいろんな場でワークショップ、講演会、授業をすることになりました。はじめは、本を読んでくださった方々がほぼ100％だったので、本に書いてある、これまで行ってきた授業を行えばいいかなと思ってたんですけど、そうはいかなかったですね。なぜかというと、そもそも授業がそうですけど、実際授業を見てみると、子どもたちの反応を通して気付いたり、伝え方によって違うニュアンスになっていたり……本書も、自分の授業をベースにしながら、出版するまでの１年間に元の授業とはずいぶん異なるものになりました。今も出版、講演会、ワークショップなどを通して、自分自身が変化している感覚です。

奥村：なるほど、今も縁起は進行中で、しかも、その縁を通して先生自身も変化し続けている。この本は、その貴重なひとつの「切片」なんですね。

末永：そうかもしれません。

アートと子ども

奥村：それでは本書の内容についてお話を。

末永：本書は20世紀のアートに絞って、アーティストが苦悩したり、格闘したりしたことをもとに、読者と対話を進めています。

そのひとつが、ピカソの「子供はみんなアーティストだ」という有名な言葉です。多くの人は、子どもが思い切り描いた絵を、私たちのものの見方で「アーティスティックだ！」ととらえる、そのような意味で納得していると思うんですが、決してそうではないですよね。

子どもは自分なりのものの見方で世界を観ている。そこから活動が生まれていくというか、模索をしている。それは、ピカソはじめ20世紀のアーティストたちが試みてきたことでもあります。自分なりの見方で世界を見て、自分なりの答えをつくっていく……それを子どもは自然にできているんだという気付きがピカソの中にあって、「子供はみんなアーティストだ」と発したのでしょう。

奥村：だからピカソは「問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうかだ」と続けているのですね。この「芸術家」は特別な技能や才能をもった美術家という意味ではないですよね。

末永：ええ、もちろん意識的にしているか、していないかでアーティストとの違いはあると思うんですが、２歳３ヶ月の我が娘を観ているとそう思います。目の前のものに対して、文化や社会的な見方に染まらない自分なりのものの見方で、その都度世界に出会っていると感じます。それこそがアート思考だと思うのです。

例えば、つい最近の話なんですけど、娘がブロックで遊んでいたんですね。ブロックで滑り台をつくって、最初は小さい人形をシューッと滑らせて遊んでいたんです。そして、しばらくしたら娘自身がシューッと言いながら滑り始めたんです。娘のつくった滑り台は小さいですし、見た目も滑り台の要素はないんですけど、娘はトコトコと登って何度もシューッと滑るんです。それは、誰かに見せる演技ではありません。娘の見ている世界の中には、今、滑り台があって、それを滑っているんだなあと思いました。

何かの対象をきっかけに心に浮かんだものを見ているというか、「見る」って広い意味をもっているなと思いました。もちろん娘の世界を100％理解できているわけではありませんが、娘になったつもりになって世界をとらえなおしてみると、もうひとつの全く違う縁が生まれるというか、パラレルワー

ルドのように同じ世界が何層にも広がっていく感覚がありました。

それは、私自身が20世紀のアートにすごく興味をもったことと同じなんですね。「アーティストたちは何を模索していたのか」ということを学んでいくうちに、目の前に見えている世界が「これって絶対じゃないのでは？」とか、ものの見方が広がったような感覚があって、そこですごくアートって面白いと思ったんです。

そのときに近い感覚を、今、我が子も含めて子どもたちと出会う中で感じています。ですから、アートと子どもの世界は近いんじゃないかなと考えています。

奥村：娘さんと、お母さんと、ブロックと、様々な資源が取り囲む場で、アートな世界が成立しているんですね。

末永先生は本書の中で、モネの睡蓮を見て「カエルがいる」と発言した大原美術館の有名な事例を紹介されていますが、私も西洋美術館で睡蓮を前にギャラリートークした際、「風が吹いている」「水面の中に地球がある」と言う子どもたちに出会ったことがあります。画面には水面だけが描かれていますが、画面の奥や手前にはたくさん世界があって、子どもたちはそこを見て話すんですね。子どもは、作品からいろんなものが見えるというか、世界に入り込むというか、それがピカソの言ったアートという意味なのかもしれません。アートと子どもは、世界との出会いという深いところでつながっているのでしょうね。決して目前の作品だけではないと思います。

末永：本当に、子どもが生まれてから見えてくるものが違ってきましたね。今は子どもと関わる時間が学びの時間になっているなと感じます。

奥村：あ、ひらめきました。子育てがアートと言ってもいいかも！ 「子育てというアートをやっているんだ」「世界が豊かに広がっていくことを体験する時間なんだ」と思えると、世の中の頑張っている保護者の方々を少しは応援できませんか？

末永：では、そんな本を一緒に出しませんか？（笑）

美術の授業という宝

奥村：私は図工や美術の中には、ビジネスや医療など多くの場面で役に立つようなたくさんのお宝があると思います。もちろん、薬として役立つ草花が、そのために咲いているわけではないように、アートはアートであることが大切です*3。でも、美術を美術教育の中だけで消化するのはもったいないと感じています。ですから、先生のご著書が18万部を超えて多くの人々に届いた＝美術で大切にされていることが広がったように感じて、すごくうれしかったんです。それが読後の第一印象です。

末永：ありがとうございます。執筆しながら、美術が好きな人や教育者だけでなく、一般の人たちにも届けたいとずっと意識していました。

でも、それは当たり前のことです。なぜなら、そもそも授業の相手である生徒は「美術が好きな人や教育者だけ」ではないですよね。美術が嫌いな子もいるし、縁のない子もいます。授業に取り組もうとせず反発しちゃうような子もいます。そんな子どもたちが、美術の授業を通して自分なりのものの見方で立ち止まって考えたり、アートって面白いと思ったりしてくれる喜びを経験してきたので、本書は美術が好きな人々ではなく、普通の人々を対象に、そこで美術を語り合いたいと思って書きました。

奥村：それが、巷に出回っている本と違う点でしょうね。今、本屋にいくと「〜のつくり方」「〜の教科書」など、ずらりとノウハウ本が平積みされている。知人はノウハウ本全盛の傾向について『多くは因果律で止まっています。ヘタをすると「成功した自分（著者）の真似をすればいい」で終わっています。』*4と指摘しています。

一方、この本は『13歳からのアート思考』と銘打ってはいますが、アート思考の方法を示すというよりも、読者とアートを通して対話するというか、アートを経験するというか、読者が授業に参加しているような感じがします。しかも扱われているのは、特別な話ではなくて、普通の授業でも取り扱われている内容です。固定的なノウハウや「これが新しい考え方だ！」のような思想を押しつけているわけでもありません。

末永：そこはとても意識していました。まず、ハウツーにならないようにしたい、やっぱりハウツーをいくら教えたところで、それを使える場面ってすごく限られているじゃないですか。でも自分で考えていく力があれば、いろいろな場面で応用することができます。本の中に全ての答えがあるとか、ハウツーみたいなものをつめこんで伝えるとかではなく、本をきっかけにして、読む人の中で答えが構築されたり、考えが生まれていったりするといいなと思っていました。

だって、私自身、子どもたちが「美術の授業では何を言っても認められるんだ」とか「こんなことをしても先生ダメって言わないんだ」とか言いながら、自分なりの探求をしていく姿を観るのがすごく好きだったんです。

奥村：よく分かります。私たちは授業で「ノウハウだけ」を教えているわけではないですよね。多くの人は「かけ算九九」や「面積の公式」などのノウハウしか覚えていないのでしょうけれど、それを学んでいる場面では、九九のつくり方とか、面積の求め方など、みんなで「ああでもない、こうでもない」と考え合っています。そこに身を投じているというか、一緒に考え合っているのが先生という仕事ですよね。

末永：はい。ですから、普段の授業と同じように難しい言葉は使いませんでした。子どもたちをイメージしながら書いていくと、「これくらい知っているだろう」「これを知らないと読み進められない」みたいな前提は成り立たないですね。なので、フォーヴィスムやキュビスムなど、美術の専門用語を一切出していません。もちろんキュビスムという言葉は、美術の人々には簡単な知識で、美術史を理解するには必要な概念かもしれませんが、そんな簡単な言葉ひ

とつでも子どもは躓くというか、微妙なモヤモヤを抱えてしまいます。大人も同じで、言葉の意味がはっきり分からないと、それ以降の対話が入ってこなくなってしまいます。それよりも「読みながら考える」ことを大切にしたのです。

奥村：私だけの感覚かもしれませんが、上から目線で書かれた本ではないと感じました。というのは今、いわゆる「おこぼれを授ける」感が大変気になっているからです。

美術や美術教育が世間一般的にブームになって久しく、そのきっかけをつくっておいてこう言うのも何ですが、ブームに乗ったほとんどの本は「あなたたち、知らないでしょうけど、美術はすばらしくて、美術館はアートの殿堂で……」というような大上段から始まって、その場所から「こんなすばらしい鑑賞法があって」「アートにこんな効果があって」というように教えや教義を授けている、そんな感じがするんです。

でも、私の知っているビジネスパーソンやNPOなど様々な人は、そのようなアプローチに対して「つまんない」と言うんです。市井の人々は侮れないというか、美術館や美術教育の問題点を見抜いていると思います。

でも、末永先生の本はピカソやデュシャン、ポロックなど、美術の授業で取り扱う宝物を高邁なものとして押しつけるのではなくて、一緒に楽しませてくれました。言い換えると、美術の授業を18万もの人々に実現してくれた。「美術の授業が本になった！」という喜びを感じたのです。

末永：そうだとしたらうれしいです。

アートは生きる基盤？

末永：「アートって何だろう」と考えたとき、それは目に見える静止した作品だけではないですよね。アーティストがどんなふうに世界を見つめたのか、そこからどう模索して自分の世界をつくったのか、そうしてできあがった作品がどのような新たな問いを社会にもたらすのか……と考えると、アートを「美術」や「学校の美術や図工の時間」だけに押し込めてはもったいないなと思います。

これまでいろいろな授業やワークショップをしたり、本や論説を書いたりしてきたんですけど、そこで触れ合った人々は、自分の生活の中にアートを展開させたり、そこで何かを感じたり、何かの折にアートな考え方をあてはめたり、置き換えたりしてくれているのかなと思います。そうだとしたら、アートは全ての学びの基盤というか、生きる上の基盤になるものなんじゃないかなと思います。

最近、総合的な探求の時間や教科横断の授業、あるいは集会のような場で話す機会も多くて、それって、読者が、アート＝美術ではなく、生きる上での基盤と考えてくれたからじゃないかなと思います。

奥村：本書を18万超の人々が手に取ったのは、そこなんでしょうね。美術の授業は、世界を自分なりに広げていくこと、友達と一緒に世界を耕していくことで、人間はそれを３万年やってきた。その一番の根っこの部分がアートだとすれば、その地点で子どもとアーティストはつながるのでしょう。

私はそれを「生存価」と呼んでいますが[*5]、『13歳からのアート思考』は、アート思考の解説本ではなく、アーティストが苦しんだり楽しんだりしたことが追体験できるような、縁を深める「生存価」の本なのかもしれませんね。

末永：固定的なものの見方や学校で教えられていた正解などは、別の角度から観たら全く異なる世界が見えたり、別の答えを引き出したりできると思います。アートでもその点が大事だとすれば、作品を正しく見る方法や上手に絵を描ける方法などを学ぶことだけが美術の授業の役割ではないように思います。

自分のものの見方で世界を見つめなおすとか、今あるものを疑ってみてもいいんだよとか、自分が違和感を覚えたときに立ち止まって考えようよとか、そんな授業であれば、それは日常生活や仕事に役に立つのではないでしょうか。

例えば、私はよく「新聞紙で何ができる？」というワークショップをやっています。新聞紙を一束渡して、造形遊びみたいにして遊ぶのですが、まるめたり、ちぎったりはもちろん、野球のバットをつくる人がいるかと思うと、新聞紙の文字の部分を切り抜いて言葉を並べる人もいます。ただひたすらただ高く積むなどの行為を追う人もいます。

興味深いのは、作業後にみんなで対話するときのこと。「この作品をこういう構図や意図でつくりました」と話す人はまずいません。作品についての言及はほとんどなくて、「はじめに新聞紙に触ったときにこんな感じがして、こんなことをしてみた」とか「他の人を見てこう思い付いた」とか、作業のプロセスや、自分の感じたこと、考えたことなどを自然と話すんですよね。

このワークショップで大事にしているのは、実は作品の出来栄えじゃなくて、制作過程において何を考えていたのか、どんな模索をしたのか、それによって自分がどう変化したのか、といったポイントです。

奥村：それ、よく分かります。私もワークショップで、ある美術作品を見せて、次にモールと色紙を渡して「何かつくってください」という鑑賞のエクササイズをやるんですが、できた後に話し合いをしてもらうと、作品だけの説明をする人は誰もいないですね。やっぱり「こうしてたら、こうなって」「このとき、こんなことを感じて」など、ちゃんとプロセスや自分の感覚、考え方などを語ります[*6]。

末永：『13歳からのアート思考』出版後に、ビジネスの世界の人たちから「変化が大きくて、先行きの見通しが立たない今の時代において、新たな価値を生むアートの授業をしてほしい」という声をたくさんいただきました。もともとビジネスに役立てる目的を第一に書き始めたわけではないので、ちょっと迷いはありましたけど、私がこの本で伝えたかったことは、いろんな人がいろんなふうに解釈してくれることでしたから、もし、私の本でいろいろ学びが深まったり、いい仕事ができるようになったりしたのなら、出版した意味はあったかなと思います。

出版を通して私自身も変化しましたし、私は変わらず私が志すアートの授業を展開していければいいので……（笑）。

奥村：ある中央省庁の幹部が「日本という国はもう人口も増えないし、経済もGDPもあがらない。このままだとおそらく『かつて栄えた国、日本』になってしまう。これから日本がやっていかなきゃいけな

いのはアートだ」と熱く語っていました。おそらく、今後アートがますます重要になっていくことだけは確かなのでしょう。

　末永先生にはその担い手のお一人としてますますご活躍ください。本日はありがとうございました。

末永：ありがとうございました。

■対談の様子は動画でもご覧いただけます

前編▶　後編▶

1. 奥村高明・有元典文・阿部慶賀編著「コミュニティ・オブ・クリエイティビティ ひらめきの生まれるところ」日本文教出版（2022）p.224
2. ウィキペディア「モナ・リザ」（2022）https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A2%E3%83%8A%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%82%B6
3. 学び！と美術〈Vol.114〉『美術鑑賞の現在地 後編（2010〜）第2回 ビジネスと美術鑑賞（1）』（2022）https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art114/
4. 奥村高明・有元典文・阿部慶賀編著「コミュニティ・オブ・クリエイティビティ ひらめきの生まれるところ」日本文教出版（2022）p.221

5. 生存価とは、「種」の生き残りやすさに寄与する性質のこと。言い換えれば、「飯を喰うのには不要」だけど「生きるのには必要」なもの。例えば脂肪には「生存価」があり、脂肪の形でエネルギーを蓄えられた方が飢餓に強い。言葉を交わし合えれば、生きるために必要な共同作業の精度が上がるので、言語にも「生存価」がある。同様に「歌やお絵かきにも「生存価」があるのではという考え方。学び！と美術〈Vol.98〉『対談：生存価としての図画工作・美術』（2020）https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art098/
6. 科学研究費補助金基盤研究（B）平成24-26年度「科研費美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」（研究代表者：一條彰子）の調査におけるナショナル・ギャラリーで受講したワークショップをもとにしています。

奥村 高明

日本体育大学　児童スポーツ教育学部　教授

1958年生まれ。宮崎県内の国公立小中学校教諭、美術館学芸員、文部科学省教科調査官、聖徳大学教授、児童学部長を経て、現職。芸術学博士（筑波大学）。専門は美術教育、学習指導要領、相互行為分析等。近著に、「美術館活用術」美術出版社（2012）、「子どもの絵の見方」東洋館出版（2010）等

末永 幸歩

東京学芸大学個人研究員、九州大学大学院芸術工学府講師、浦和大学こども学部講師。アートを通して、自分なりのものの見方で「自分だけの答え」をつくることに力点を置いた探究型の授業を中学校や高等学校で実践してきた経験を持つ。現在は、全国の教育機関や企業等で、年間100回を超えるワークショップや講演を行う。日経STEAMアドバイザー、Eテレ「ノージーのレッツ！ひらめき工房」監修、ニュース共有サービス「NewsPicks」プロピッカーなど兼任。様々な企業や団体とアートや教育に関する事業共創に力を注いでいる。著書に18万部を超えるベストセラーとなった『13歳からのアート思考』（ダイヤモンド社）、動画コンテンツに『大人こそ受けたい「アート思考」の授業 ―瀬戸内海に浮かぶアートの島・直島で3つの力を磨く―』（Udemy）などがある。

まなびと+Plus vol.10

日文 教授用資料

令和4年（2022年）11月20日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33607

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690